

I. 実施概要

(ア)調査の目的

本調査は、内部質保証ならびに自己点検・評価の一環として、神戸女子短期大学（以下、本学とする）の現状・特徴を把握し、マーケティングやエンrollment・マネジメントに活用することを目的とする。

(イ)調査対象

2019年10月1日現在、本学全学科（総合生活・食物栄養・幼児教育）に在籍する全学生534名（うち3名の休学者含む）を対象とした。

1年次生 263名

2年次生 271名

(ウ)調査方法

一般財団法人 短期大学基準協会が実施している『短期大学生調査(Tandaiseichosa)』を用いた。本学においては、平成29年度から継続して同調査を行っている。

方式：マークシート式

時期：令和元年10月～11月中旬

回収率：回答者数528名/在籍者数534名 98.9%（休学者を除く実質回収率：99.4%）

II. 結果・考察

【結果】

- A0入試による入学者割合(43%)増加傾向（昨年度本学(36%)、今年度全国(32%)）
- 入学動機は昨年度とほぼ同様の傾向
 - 重視している項目（重視した+やや重視した）
 - ① 自分の興味があることや専門分野の内容が学べる(94%)
 - ② 就職するのに必要な資格が取れる(83%)
 - ③ 4年制大学より学費がかからない・キャンパスの雰囲気によさそうだった(75%)
 - あまり重視していない項目（重視した+やや重視した）
 - ① 奨学金や学費免除などの経済的サポートがもらえる(36%)
 - ② 4年制大学に編入することができる(42%)
 - ③ 専門学校に行きたくなかった(44%)
- 授業内容の傾向（本学 vs 全国平均）
 - 全国平均より多い項目
 - ◇ パソコンなど情報機器を使う(89% vs 81%)
 - ◇ キャリアに関する教育(66% vs 61%)
 - ◇ 定期的な小テスト(86% vs 83%)

- 全国平均より少ない項目
 - ◇ 教員が提出物に添削やコメントをする (58% vs 73%)
 - ◇ プレゼンテーションをする (53% vs 62%)
 - ◇ 学生同士でディスカッションをする (75% vs 84%)
- 学習時間：全国平均と比して、授業に関する勉強に費やす時間は多いが、授業に関係ない学習に費やす時間は少ない傾向
- 教員と関わる機会：全国平均と比して、進路相談は多いが、学習や研究に関して関わる機会が少ない傾向
- 活動や体験：全国平均(30%)と比して、サークルや部活などへの参加が少なく(13%)、本学昨年度(20%)と比しても減少している
- 施設・サービス：全国平均と比して、全項目において同等以上の満足度
- 教育：全国平均と比して、授業や資格支援などに関する満足度は高いが、サークルや部活に関しての満足度が低い
- 能力や知識：概ね向上・増加したと実感しているが、リーダーシップや外国語を使う力、データなどの理解力、読解力、プレゼンテーション能力に関しては過半数が向上していないと感じている
- 意識や関心：計画性・スケジュール管理、キャリア意識、自己理解などは向上しているが、地域や社会貢献への意識、選挙への関心は変化していないと感じている
- 進路希望：総合生活学科は「ビジネス・経営系」「アパレル・ファッション系」「運輸・通信系」「旅行・ホテル・ブライダル系」「美容系」「建築・インテリア系」「医療・看護系」「食・栄養系」など多岐にわたり、食物栄養学科は「食・栄養系」(66%)、幼児教育学科は「保育・こども系」(91%)と各学科の特徴が表れている
- 総合評価：充実度(70%)、他の学生(73%)・教員(69%)・事務職員(54%)との関係、キャンパスの居心地(62%)、まなび(学習)(73%)については、総じて満足度が高い

【考察】

令和元年度の結果を受けて、本学および在学生の特徴や傾向は、知識・技能の向上、キャリア意識を高めることなどに注力していることが窺える。これは、入学時点から、就職や資格に対する意識の高い学生が多く、秘書士、栄養士、保育士、幼稚園教諭などの資格取得を目指していること、また、早期からのキャリア教育や支援が大きな要因と考えられる。

そのため授業以外のことに関する学習や部活・サークル活動などに費やす時間が少ない傾向にあると考えられる。今後は、一定水準以上の学修成果を得ることと、学生としてふさわしい様々な経験・体験をバランスよく両立できる学習・生活環境の整備が必要である。

また、現在の高等教育機関に求められる社会人基礎力の向上に向けて、知識・技能だけでなく「資質・能力(コンピテンス)」の向上を図る教育プログラムについても検討する必要がある。